



四季

兔

雜

別旅

賀

哀傷

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

後撰和歌集卷第一

春歌上

元日ふ二糸のきよきふりまふてきろき
サリしちたをいふて

藤原敏行卿

降雪の白衣おきろきふりまふてきろき

元日ふ二糸のきよき

元河内守

けさの雪けがけは去日山はあけ雪は花もやん

足感王

夕やりの雪のかけあふもて若菜摘ふは休とて思

ある人のりふに方まゆりの女もゆり

けり月口久しくて正月のついで

らるるゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

とていふ

白中ねとてさうまゆのよるはひあつ身もあかぬ

朱花院乃よりおきりしまくろふさう

いゆりてえつさうまゆもきりて是光朝

及みつさうしる

杉もひきさるも摘むと成るるといふは杉もあかぬ

院少女

中ふさくもあかぬもあかぬもあかぬもあかぬ

子日たゆしよのあかぬもあかぬもあかぬもあかぬ

かんまうりあかぬもあかぬもあかぬもあかぬ

とていふ

しつり本風をそんておなをこめ指し枝の
女り走つたよまふらり也を竹をふさ
しなわらうらうらあひたりし
と終もあひひもあひひもあひひも
あひひもあひひもあひひもあひひも
竹をり

いのみまふ殿うんま口の雪ふふけぬ冬
歌しつらん 宗院たはるる

まゆりた折つる也と枝たなう我もらうも海へん
ふ裁しつらん竹をうへて又のまふとさく
糸多れん 中物え道辨物也

やいらく梅で梅うらひのまふをふつる自らたは
延喜の序の時うらひのまふにまふりたる

まふ殿梅しよかり之みゆふらうも花物なん
まふりしつらんを歌ふしつらん
まふりしつらんを歌ふしつらん
まふりしつらんを歌ふしつらん
十二そらうら ね

あひひもあひひもあひひもあひひも
あひひもあひひもあひひもあひひも
あひひもあひひもあひひもあひひも

人々をたづねて待つるにあらざるは
まじき人な

いふは我分神のまじりたるは
た

我にふとまじりて 梅花を何もくは
よそくふよとわかくし

よそくふよとわかくし 我若し梅の
よそくふ物とてん梅花とてん

よそくふ物とてん梅花とてん 人の
心はわたくしとわかくし

心はわたくしとわかくし 梅花と
梅花とてんわかくし

梅花とてんわかくし 梅花と
梅花とてんわかくし

わたくしとわかくし

梅花とてんわかくし

梅花とてんわかくし 梅花と

梅花とてんわかくし 梅花と

梅花とてんわかくし 梅花と

梅花とてんわかくし 梅花と

梅花とてんわかくし

梅花とてんわかくし 梅花と

梅花とてんわかくし 梅花と

梅花とてんわかくし 梅花と

いづれもよきものぞとてけしきも人たるま
し物なきに雪のふりかへるるを

費之

深雪のふりかへる花らるる雪のふりかへる
ま物なきに雪のふりかへるるを
とけたるとて雪のふりかへるるを
かへるるを如くも雪のふりかへるるを
午まのふりかへるるを

竹の葉

まき毎のふりかへるる花らるる雪のふりかへるるを
とけたるとて雪のふりかへるるを

後撰和歌集卷第二

其奇中

とけたるとて雪のふりかへるるを
とけたるとて雪のふりかへるるを

夏永技藝坊

とけたるとて雪のふりかへるるを

とけたるとて雪のふりかへるるを

夏永行術坊

とけたるとて雪のふりかへるるを

修正局

とけたるとて雪のふりかへるるを

七

花ふりしるほふけいしる人ける物りふ

まはは作

やうりひんかま金めは尾との橋おてかきん
おりしるきあくしとありしとあきり

橋花色かきりては花きりしとあきりては花きり

いせ

とぬのかきりては花きりては花きり

あはれおしとの山花のしるはさるしるはさる

あきりては花きりては花きり

橋花きりしるほふけいしる人ける物りふ

橋花白くしるほふけいしる人ける物りふ

より飲所付ゆきつとあきりては花きり

今自橋きりては花きりては花きり

あきりては花きりては花きり

まはは作

橋花きりしるほふけいしる人ける物りふ

いせ

と柳のきりしるほふけいしる人ける物りふ

忘れぬよりの人の慕りし歌のしるし

通巻五

春を花のしるしにうつらうつらと
ふとよきとまじりてしるしのあはれしるし
ゆかり

我病花のしるしにうつらうつらと
よきとまじりてしるしのあはれしるし
ゆかり

海をていつくは鏡をいふはしるし
ゆかり

後撰和歌集卷第三

去来下

海太故大層ありしをいふはしるし
ゆかり

春を花のしるしにうつらうつらと

海をていつくは鏡をいふはしるし

ゆかり

去来

海をていつくは鏡をいふはしるし

ゆかり

海をていつくは鏡をいふはしるし

いづれ

いづれ

教ふ花の隈りなす
胡えおちて
しきりけし

いづれ
いづれ

いづれ
いづれ

いづれ
いづれ

いづれ
いづれ

いづれ
いづれ

いづれ
いづれ

いづれ
いづれ

いづれ

いづれ

けり枝ともしのこゝろをさるれば花をいへく
らふとくもなれし

我名れ歌のまもりかたはる花とくして
ちのまのりけり花のまもりかたはる
きくおとけりかたはる花とくして
まのりけりかたはる花とくして

後人

けり枝ともしのこゝろをさるれば花をいへく
らふとくもなれし
かゝるうらみもなれし花のまもりかたはる
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして

花のまもりかたはる

花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして

花のまもりかたはる

花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして
花のまもりかたはる花とくして

うらみ人いひ

まに花をすもあてなる花は
再いふのやうにりこのあまにせし物も
はるしのあまのうらみせし物も
まに花をすもあてなる花は

まに花をすもあてなる花は
再いふのやうにりこのあまにせし物も
はるしのあまのうらみせし物も
まに花をすもあてなる花は

うらみ人いひ

花のちりきり空に人のこころは
月のかりりうらみけり

うらみ人いひ

あまの月をすもあてなる花は
再いふのやうにりこのあまにせし物も
はるしのあまのうらみせし物も
まに花をすもあてなる花は

うらみ人いひ

まに花をすもあてなる花は
再いふのやうにりこのあまにせし物も
はるしのあまのうらみせし物も
まに花をすもあてなる花は

うらみ人いひ

今より花事させん様花らるるよもふさるるゆゆに

教出の如也

月も花もさるる様花らるるゆゆにさるるゆゆに

考之

さるるゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

花物如也

わささるるゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

歌の如也

左京元方

一年ふさるるゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

寛永年出付さるるゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

ゆゆのゆゆにさるるゆゆに

左京教出の如也

さるるゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

左京元方

さるるゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

ゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

典侍さるるゆゆに

さるるゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

ゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

ゆゆにさるるゆゆにさるるゆゆに

候人

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに
あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

僧正通眼

折つてついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

たいていらく

らんくし

水産物をついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

やまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

ついでに

三條右大臣

限るついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

兼辨朝臣

いふついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

兼之

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

三條右大臣

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

兼辨朝臣

あまのついでに神はひびきしるはるりあまのついでに

ついでに

ちあやけ下ゆ水法をいほくそ花のまをそけり

歌不意

傍人不意

うらひをのまよふうそふ柳也まもりそまはし凡
さくしのこまはれらるるこころ

んつね

この中ふ散くそぬん桜花西氣ふの子をそまら

ちあやけのそこりしゆらんゆらるるあやう

原仲宣歌后

散草花のほろけをそまらぬそふあやう

さくしゆれらるるとんこ

一と千人一かた

ゆきふきさるる衣はるるわらふる月日は押しけり

ゆきふきさるる衣はるるわらふる月日は押しけり

一と千人一かた

昔の

あやうらけのそこりしゆらんゆらるるあやう

一と千人一かた

たん

あやうらけのそこりしゆらんゆらるるあやう

あやうらけのそこりしゆらんゆらるるあやう

あやうらけのそこりしゆらんゆらるるあやう

あやうらけのそこりしゆらんゆらるるあやう

最系歌正

あやうらけのそこりしゆらんゆらるるあやう

一と千人一かた

昔の

しつと花をよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
八重舞のしらぬかたはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

あふよめいりてはなぬのめいほほよめ
あふよめいりてはなぬのめいほほよめ

きり

そのあはれをむらりしもの花をとりてい
入つて侍る

しりしんまのつゆはけり花のうしとんつもねれむ
ん

うたのあはれしとまの御志はたつはねもあまの御
おのつふれりまゝありて

時と風よりの香かゝるるもはねのあまの御志のた
なまのつゆはけり

白くはなはけり花のうしとんつもねれむ
つゆはけり

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

おのつふれりまゝありて
おのつふれりまゝありて

かきのちりりのゆんゆんたる女のくちゆ
しんじり入るゆき

ゆきかきしんじり入るゆき
ゆきかきしんじり入るゆき

ゆきかきしんじり入るゆき
ゆきかきしんじり入るゆき

ゆきかきしんじり入るゆき
ゆきかきしんじり入るゆき

ゆきかきしんじり入るゆき
ゆきかきしんじり入るゆき

大春日作絶

ゆきかきしんじり入るゆき
ゆきかきしんじり入るゆき

ゆきかきしんじり入るゆき
ゆきかきしんじり入るゆき

ゆきかきしんじり入るゆき
ゆきかきしんじり入るゆき

ゆきかきしんじり入るゆき
ゆきかきしんじり入るゆき

とこにたのむはてしなくしつとてきかぬとてふはたか
ふはふまのてれき郭のつとてふはたか
之系た右長すねふたつらつてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
人をつとてふはたかをつとてふはたか
月みわらつたつらつてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか

あつたの女

八月の海にわたりつとてふはたか
八月の海にわたりつとてふはたか
八月の海にわたりつとてふはたか
八月の海にわたりつとてふはたか
八月の海にわたりつとてふはたか
八月の海にわたりつとてふはたか
八月の海にわたりつとてふはたか
八月の海にわたりつとてふはたか
八月の海にわたりつとてふはたか
八月の海にわたりつとてふはたか

友系呼子物伝

いふせん小舎の心れはつきがむらつとてふはたか
たいしつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか
つとてふはたかをつとてふはたか

友系呼子物伝
つとてふはたか

とていふはなもなまもれはなやまは梅子たなはは(か)
昨平ねたのまこしつらふしゆ々つてこ
乃花と斗りてしらてゆをわがこめたふつけ
内はのうふかふふをくりゆ々

大政大臣

梅子へいつれもなまもれとていふは長んたり
かてこめ花らりうふもふり我は妹をらうかほし
育らうとてしらもらうおとされははまのねなるさ
うめのははのねまてゆめまのまをさかからせつ
かくたのねまのこしてあけはなははの月まかく
はらなはなははの月まかく

うつりのまこれそとていふはゆり
まこしつらふしゆ々つてこ
つゆもかれぬぬいふりのまらあまねをひにかり
こい

天川あまきし夏ぬかちる月のまじまは
月まきしつらふしゆ々つてこ
もまきしつらふしゆ々つてこ

貴之

花もらり都はらつらふしゆ々つてこ

及系雅正

花もれはなもなまもれはなやまは梅子たなはは(か)
後人

三十一

三十一

秋田のおもてなしの心遣い

入ねる世

女のおもてなしの心遣い

女のおもてなし

入ねる世

秋田のおもてなしの心遣い

入ねる世

秋田のおもてなしの心遣い

秋田のおもてなしの心遣い

秋田のおもてなしの心遣い

入ねる世

秋田のおもてなしの心遣い

秋田のおもてなし

入ねる世

秋田のおもてなしの心遣い

秋田のおもてなしの心遣い

入ねる世

秋田のおもてなしの心遣い

秋田のおもてなし

入ねる世

秋田のおもてなしの心遣い

秋田のおもてなしの心遣い

入ねる世

秋田のおもてなしの心遣い

秋田のおもてなし

入ねる世

うねりたる舟にふりて七口れあすきしり
くまの女のしんてゆきり

一人一人

夫早計の舟をまよひてふりて舟にまよひ

かたぬり人のしんてゆきり

かんてゆきり

しんてゆきり

一人一人

たふひるたふひる

一人一人

天川をたふひる

ふりてゆきり

舟のしんてゆきり

あつたつた

一人一人

あつたつた

七口の日

七口の日

一人一人

天川をたふひる

ふりてゆきり

一人一人

あつたつた

か

ついでに申すは田のうらやちのりしねをかくる

影

藤原守文

叶のうらやちの白雲かくつるはうらやちのうらやち

後撰和歌集卷第六

秋新十

いそがしうらやちの秋新しかりたれかそ

かほりたる

きよのほりもた

秋新れたるはつゆのうらやちのうらやち

若人としつる秋新のうらやちのうらやち

寛平十一年付まさのうらやちのうらやち

とんかん

浦ちくは秋新れりやや煙のうらやちのうらやち

かたのうらやちのうらやちのうらやち

友系無凡

斗りうらやちのうらやちのうらやちのうらやち

おのれおにをうらむ花もくく人かぬれつた
とほ花の影もさぬれおのれをさぬれ
くのおうりしてゆきまゆくるうーさんていの
ゆきまゆくるうらぬれ

さんてい

近治文衣

近治御製

おのれおにをうらむ花もくく人かぬれつた
とほ花の影もさぬれおのれをさぬれ
くのおうりしてゆきまゆくるうーさんていの
ゆきまゆくるうらぬれ

近治御製 寛平

後撰和歌集卷第六

秋奇十

おのれおにをうらむ花もくく人かぬれつた
とほ花の影もさぬれおのれをさぬれ
くのおうりしてゆきまゆくるうーさんていの
ゆきまゆくるうらぬれ

おのれおにをうらむ花もくく人かぬれつた
とほ花の影もさぬれおのれをさぬれ
くのおうりしてゆきまゆくるうーさんていの
ゆきまゆくるうらぬれ

さんてい

おのれおにをうらむ花もくく人かぬれつた
とほ花の影もさぬれおのれをさぬれ
くのおうりしてゆきまゆくるうーさんていの
ゆきまゆくるうらぬれ

近京異凡

おのれおにをうらむ花もくく人かぬれつた
とほ花の影もさぬれおのれをさぬれ
くのおうりしてゆきまゆくるうーさんていの
ゆきまゆくるうらぬれ

らん人しん

おのれは花をさうく女は花をさうく人さうくは花をさうく
とほ花の鮮やかさねはよのすそにひらひらと
くわくくとしてゆきよはゆきよとせんとて
ゆきよとゆきよとゆきよとゆきよと

近海史衣

介のたれはよふれはにほくあはれきり花のほ
ゆきよ

近海史衣

人方も花のほれは花のほれは花のほれは
身も花のほれは花のほれは花のほれは
あはれは花のほれは花のほれは花のほれは

法皇御製 寛平

白き花のほれは花のほれは花のほれは
ゆきよ

いせ

うへそくまは花のほれは花のほれは
花のほれは花のほれは花のほれは
ゆきよ

たふ大后 九条

折りては花のほれは花のほれは花のほれは

久補

月代は花のほれは花のほれは花のほれは

たふ大后

よふは花のほれは花のほれは花のほれは

大后

三十一

今も昔も同じ女を白鳥のついでとていふは
あはれなりて侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは

侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは

侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは

花房をふらふもかたわりの首とのよき事と
いふべし

宿もせまらざるも我らもいふべし
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは

侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは

侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは

侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは
侍る女にあらざるは侍る女にあらざるは

三十四

とつとつ入るゆきれはすあいのち
たり 読人しらす

白きけしにたまふ夢きけ花の色くありし
八月まゝの十日ふふるのそけりりたる
口とそけりしけりふふふふりりるごと
のくにさしきききかたりたれつらりし
けり 読人しらす

そりける月もけりぬ花わめわめしとあつたさ
ぬん 読人しらす

秋の国あかりやの庭乃白きさける秋葉もれあ
けりるくまもろまのこわすまのあはれをたす
けりり
とつとつ入るゆきれはすあいのち
たり 読人しらす

ゆきり折てかさむ胡みへ鹿をたしけりけ秋
葉 読人しらす

我者れたの秋葉あふりのらん人かやとえ
ん 読人しらす

白あけをうらみけり秋葉を折ていふ我やうら
ん 読人しらす

秋葉の色はくはさうはわさかきふく老きし
たへし 読人しらす

秋の国あかりやの庭乃白きさける秋葉もれ
あ 読人しらす

清人ノ一ノ

或神ノ名もそとてゆる天ノ中れそくしと流せしん
大井れ持てとてはるりゆへしとあきりしけり
しり初の事そくしと白鳥とそくしとてむふそくしと
也とてしりゆへしとそくしとされり

母ノ

俾鹿ぬきもはるりゆへしとあきりしけり
大井れ持てとてはるりゆへしとあきりしけり

又を却康

白鳥の流せしとてはるりゆへしとあきりしけり

しりゆへ

はるりゆへしとてはるりゆへしとあきりしけり

しりゆへ

とてはるりゆへしとてはるりゆへしとあきりしけり
白鳥の流せしとてはるりゆへしとあきりしけり
大井れ持てとてはるりゆへしとあきりしけり
しり初の事そくしと白鳥とそくしとてむふそくしと
也とてしりゆへしとそくしとされり

母ノ

はるりゆへしとてはるりゆへしとあきりしけり

しりゆへ

はるりゆへしとてはるりゆへしとあきりしけり

よき人よ

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは
神ようつる月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは
おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

小野英村

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

よき人よ

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

よき人よ

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

よき人よ

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

よき人よ

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

よき人よ

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

おのれは月を頼りてあふりては来ぬとてたのれは

上

一十千くし

秋のふらりも物おもん如良花のさきとほをさひしつ
とまよひ 三丁もあつた松生とよみふやとし隙をゆるん
み款まよとさるし 物なるふし

如良花白く盛るとる時うけ考むか物 けりけり
しつひのうさりわたりしつられ隙うと
よとるくしをせりしつひの年こり
かきしに

如良花くさけけらぬあまのふくはまらかけりしつ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
りしはりくを女のさうにかけくくくくくくくくくく
てゆららぬあひしふけんけりける

はるを伴あつた 花れとさるくくくくくくくくくく
まふくをさつてし 枇杷友大郎

如良花おんけつしつふささくくくくくくくくくくくく
とんけつしつふささくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

後撰和歌集卷之七
牡丹下

歌石記

後人

後を過ぎる人より物立ちしり
牡丹のありし一は花のつれなき
をん年所付まことのまれうと合ま

五原棟梁

花のそよもすれ牡丹の咲くとき
牡丹のそよもすれ牡丹の咲くとき
牡丹のそよもすれ牡丹の咲くとき
牡丹のそよもすれ牡丹の咲くとき
牡丹のそよもすれ牡丹の咲くとき

女のふくもつてほろゝ我も人のこころを
かき

ねほまかりひかしてさうらのふくもつてほろゝ

あつた月日めめちちつてふくもつてほろゝ

うり今もつてほろゝかかかか長をひかひかおれ

ねほままもつてほろゝかかかかかかかかかか

ねほままもつてほろゝかかかかかかかかかか

ねほままもつてほろゝかかかかかかかかかか

ねほままもつてほろゝかかかかかかかかかか

ねほままもつてほろゝかかかかかかかかかか

ねほままもつてほろゝかかかかかかかかかか

ねほままもつてほろゝかかかかかかかかかか

ねほままもつてほろゝかかかかかかかかかか

ねほままもつてほろゝかかかかかかかかかか

ねほま

四十一

ねほま

四十一

ま田ふをこゆて 友別

か中よりま田ふのれれりま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

かま田ふのふりてま田のふりて

山凡のよき...

四十四

山凡のよき... 花のよき... ちりりて... 花風... ちりりて... 花のよき... ちりりて...

母の

ちりりて... 花のよき... ちりりて... 花のよき...

父の

ちりりて... 花のよき... ちりりて... 花のよき...

母の

ちりりて... 花のよき... ちりりて... 花のよき...

父の

ちりりて... 花のよき... ちりりて... 花のよき...

あひしうしてゆきる男のえいしうとて
ゆきる女も月ばかりふつりたる

右道

人方の秋のそよ風はなほあつたさうさう

いさよ〜いさよ〜

秋〜もあつたさうし白雲の〜もあつたさう

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

いさよ〜いさよ〜

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

いさよ〜いさよ〜

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

いさよ〜いさよ〜

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

いさよ〜いさよ〜

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

いさよ〜いさよ〜

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

いさよ〜いさよ〜

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

いさよ〜いさよ〜

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

いさよ〜いさよ〜

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

いさよ〜いさよ〜

あひしうしてゆきる男のえいしうとて

ゆきる女も月ばかりふつりたる

乃がまきこころ作りたれ

係りし守

あからんくさあとし今うつこをかぶつてけん
あはれなまきりしそ人ののりたれ

係りし守

流し流よとろく花うそもさるぬ人折れん
月の下りいでなすもさるく歌き作るさる
紀友知うそもさるふとさるいそこせ
て作るれいさるさるたをさる
はらうしけり 夏永あゆ

おはれしつゝはの花をれははるはあもぬし
はらうしけり

流し流よとろく花うそもさるぬ人折れん
月の下りいでなすもさるく歌き作るさる

費之

杖の月光をけしおはれおはるは
こころしす 係りし守

杖毎一つととまねなふひいもつらうし
男れんさうしゆんしともしもれかりとさあ
こひおほうししよりたれたこころし
さる

皆くおしおきりしとあはれまふさるあはる
おはれしす

吹風やうらるおや杖の月影のこころし
おはれしす

神正月の時より神正月の時までの本のこの際まで

れどもその時を過ぎ神正月の時までのことなる

山一ツのとき

清基は師

うす月の時と身にしてうぬら流し入る

十月つりに人ねふたふかふん

せりりしうしうれもけしなほ

さしあふつうりさる 辰系大房領

おまの情も神と人しつ時

也

大に子な

もさらし時をもつ 神ふき

神

神

らりつ神正月の時より

つらね 毎一しうま

つらりし

批記

人ともたふらるる

也

いせ

候と一の時より

く

ま

よめれ

也

也

神正月の時より

たゞし

身もくしておねおもいんかゝくつとねえさふられ
まの口もさしんつりいなる

くしんかゝりて我神のまらもけとめら
い

くはらけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

けりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

けりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

けりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

母

けりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

母

けりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

母

けりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

母

山崎
山崎

五十

年々ふるふるのねとせん渡るるあま雪の友とて

あいらしく

あいらしく

とれれもあいらしくね松ににわたり雪を花にうまれ

お松のねたま鏡を白雪にうまれぬ浪の音にうまれ

こもりもあいらしくもくみくみわたりつとせもあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

ゆきあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

あいらしくあいらしくあいらしくあいらしくあいらしく

後撰和歌集卷第九

表之奇一

かろししあひそくきつる人まつ心
こゝろて又らおかそくゆけと

深きう物

東信のまねかまきふあひそくを信しうけ

無川よりくる人へあひそくしゆけを
人よりさかしくゆめれよかりてつら

貴之

曉とあひあはれあひそくを信しうけ

原中あはれあひそくを信しうけ
かりゆきあはれあひそくを信しうけ

五十三

サリきをとりふんてはうりしる

いっつう

申すはあつても人をこつておつたからんはれあま

あつてして侍る人のいふふあつてん

とてはうりしる 元長年

あつてもつたをきくと存いそつちあつてつち

夕景は極まから白あれとくつちあつてつち

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

つちあつてん

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

か

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

せ

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

三統とせ

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

あつてもあつて侍る人のいふふあつてん

きれたはかりしる

まのぢれと

新ふもそはまりあひのからちんたつらうあぢしは
ま

年まゝ

あされすまをゆし高のかり海一ふらに新あぢを
大いしす

一ふらに新あぢを

くひらうへ田のあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
ま

まゆりぬれしあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
女のあぢは

あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは

あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは

あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは

あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは

あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは

あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは

あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは

あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは
あぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢはあぢは

上田城

廿七

えうさかるい女をすまひのけりてつらり
けり

救ふぬ原さくぬ郭さひくさぬねとつてささ

い世のさる女やあひさしひてのちん
りふほしきく又あひさくゆなれは

これさけ午に

あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん
女のさしきりさるさるさるさるさるさる
をいせさるさるさる

よふ人しらす

あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん

あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん
あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん
あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん

去依

浦さるさるさるさるさるさるさるさる

さるさる

あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん
あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん
あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん

伴依

あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん
あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん
あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん

よふ人しらす

あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん
あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん
あつよめさしきさるさるを件に信おすゆん

廿八

そのひらくはうらうら

いそひ谷原水井昔の人のあまきなるわけてそよ
人をあひしめては久しうかきそよもつら
とまてしむれ

娘もあまきなほしめりうらうらまらるるゆふを
歌しよ

ひやうもあまきなほしめりうらうらまらるるゆふを
みよあまきなほしめりうらうらまらるるゆふを
きよあまきなほしめりうらうらまらるるゆふを
まよあまきなほしめりうらうらまらるるゆふを
あまきなほしめりうらうらまらるるゆふを

今もあまきなほしめりうらうらまらるるゆふを
あまきなほしめりうらうらまらるるゆふを

あまきなほしめりうらうらまらるるゆふを
あまきなほしめりうらうらまらるるゆふを

あまきなほしめりうらうらまらるるゆふを
あまきなほしめりうらうらまらるるゆふを

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or header.

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

Handwritten text on the left edge of the left page.

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

あつたてのうらみはなほつら
あつたてのうらみはなほつら

きわくつらりしる

きりくつらに敷らる花よりなほのまのけはあは
女

とすけ我ながら世とゆもねりおのこもあは
斗くこふつらりしる

涙よりえらぬこころのおもきらぬくは友あはれり
女のちりんけりる

しほれをくきにさして狩野西とほ去の松
わたりこふつらりしる

かろくちあはれゆもきぬのほりくふ長きりたり

後撰和歌集卷第十

五十一

女のよふこころつらりしる

藤原忠房朝臣

人よそとせしおのちもあはれこころそくちりたり

んしのしそね

ひらひらとほりけりこころひらひらとほりけり

まよひもあはれ

我がこころはこころのちりりしる

まよひしるわらふもあはれしる

保中正

あはれこころはこころのちりりしる

あつたてのうらみ

念見玉

あつたてのうらみ

中房お良

あつたてのうらみ

女のさうしふふさく

及赤補又

あつたてのうらみ

あつたてのうらみ

清人

あつたてのうらみ

あつたてのうらみ

あつたてのうらみ

板敏仲

あつたてのうらみ

大物

あつたてのうらみ

敏仲

あつたてのうらみ

あつたてのうらみ

あつたてのうらみ

あつたてのうらみ

あつたてのうらみ

六十二

山崎

十三

かすたる人の心と白鳥の如きものもよりの事なるか
ちひしきもの行たる女を久しうとくせん
けされいふことなきをんものけしひしき
ゆけき

後示教右明長

吾れ世に平儀して時多とく乃とくそ我まはる
ふきうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
かゆきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう

小西うあひ

我れ一ひきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう

枕肥た大長

わんきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう

深等明長

東海のはれきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう

紀も各明長

ふてきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう

後人

あはれきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう
きうきうきうきうきうきうきうきうきう

上

六十四

いふすゝらて絶つる長ね改守りあはしにて
おとよほしけり

おとよほしけり
おとよほしけり
おとよほしけり

おとよほしけり
おとよほしけり
おとよほしけり

おとよほしけり

おとよほしけり
おとよほしけり
おとよほしけり

おとよほしけり
おとよほしけり
おとよほしけり

おとよほしけり
おとよほしけり
おとよほしけり

おとよほしけり
おとよほしけり
おとよほしけり

おとよほしけり
おとよほしけり
おとよほしけり

おとよほしけり

おとよほしけり
おとよほしけり
おとよほしけり

六十五

元良の子

とらみとつらつらに焼かれ
女のまゝにまりつらつらに
ゆゑにまりつらつらに
藤原典国

叔母とわんときつたみ浦子
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに

貴之

あつらひつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに

大に御留

つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに

元良の子

大言のまをわ我をわ
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに

大に御留

つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに

大に御留

あつらひつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに
つらつらにまりつらつらに

山崎守備
九十五

九十五

さうりたるやう

川守備は中津の海にいておちよをさるやう

つらつらたるやうつらつらたる

橋のたのむ

天守よりけりしきふのききつらつらたる

母の

とよのえは海にちぬいしきふのききつらつらたる

おちよはらつら

一とくし

んぬねよの海にちぬいしきふのききつらつらたる

さうりたるやうつらつらたる

中津守備 作樂女

さうりたるやうつらつらたる

つらつら

延喜所記

現しきよけりけるさうりたるやう

たつらつら

延喜所記

さうりたるやうつらつらたる

延喜所記

おちよはらつら

延喜所記

さうりたるやうつらつらたる

延喜所記

さうりたるやうつらつらたる

つらつらたる

けり

書也

五月廿一日に命して一月をたしむるは
平定より

我が世に清く正しくありては
世に

あつたはばはたしむるは
いふにせむ女のみちありたり

いふにせむ女のみちありたり
いふにせむ女のみちありたり

いふにせむ女のみちありたり
いふにせむ女のみちありたり

いふにせむ女のみちありたり
いふにせむ女のみちありたり

夏末迄終

いふにせむ女のみちありたり
いふにせむ女のみちありたり

いふにせむ女のみちありたり
いふにせむ女のみちありたり

いふにせむ女のみちありたり
いふにせむ女のみちありたり

いふにせむ女のみちありたり
いふにせむ女のみちありたり

いふにせむ女のみちありたり
いふにせむ女のみちありたり

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたて

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたて

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたて

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたて

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

あつたて

あつたてのうらみはなほあつたてのうらみ

原 正
七十一

七十

東 正
原 正

原 正

久 正
原 正

原 正

万 正
原 正

原 正

原 正

今 正
原 正

原 正

和 正
原 正

原 正

降 正
原 正

原 正

片 正
原 正

原 正

其 正
原 正

原 正

つれづれ

元良の予こ

逢事のそとをいれり長きそらひのねねをのそとく

こころ

あふれ

ふくねをいれり昔のねりふもくもあふれんそとく

あふれいれりこころ

及京右團

ふり火のうらむぬふ流つらりいさのそとくけなす

言平の予こいれりいれりいれりいれりいれり

つらりいれりいれりいれりいれりいれりいれり

てねりいれりいれりいれりいれりいれりいれり

小入深敷

あふれいれりいれりいれりいれりいれりいれり

あふれいれりいれりいれりいれりいれりいれり

浦いまた

こころいれりいれりいれりいれりいれりいれり

月をいれりいれりいれりいれりいれりいれり

あふれいれりいれりいれりいれりいれりいれり

いれりいれりいれりいれりいれりいれりいれり

あふれいれりいれりいれりいれりいれりいれり

あふれいれりいれりいれりいれりいれりいれり

あふれいれりいれりいれりいれりいれりいれり

あふれいれりいれりいれりいれりいれりいれり

あふれいれりいれりいれりいれりいれりいれり

Handwritten notes in the top right margin of the right page.

Handwritten text in the top section of the right page.

Handwritten text in the middle section of the right page.

Handwritten text in the lower section of the right page.

年一色人

Handwritten text in the bottom section of the right page.

Handwritten text in the bottom section of the left page.

原わらあきしれお古

Main handwritten text in the middle section of the left page.

Main handwritten text in the bottom section of the left page.

後撰和歌集卷第十一
四十四

七十四

後撰和歌集卷第十一

悉所三

女乃くまふつさく

三條右大臣

かき 共のき後心はむら 人ふりてさるる

左大臣

ま 上はかきも心はむら 人ふりてさるる

左大臣

ま 上はかきも心はむら 人ふりてさるる

女乃くまふつさく

くまふつさく

況もほろろ人の心はむら 人ふりてさるる

らんわつとくはら女のあひこくはるに

費之

くまのきりぎりすのうた
うりそあたるこころにけりたる女
かきりにさす井くさあみさくひ
ひれよこあまのんきりあひる
けしえをうらめしうりたる
くまのきりぎりすのうた

女

宿之てはるも平はぬまうらな

あはれなりけり
源のきぬあまのうた
くまのきりぎりすのうた

中務

流しはるも平はぬまうらな

原佐明

あはれなりけり
くまのきりぎりすのうた
うりそあたるこころにけりたる女
かきりにさす井くさあみさくひ
ひれよこあまのんきりあひる
けしえをうらめしうりたる

本院作長

くまのきりぎりすのうた
うりそあたるこころにけりたる女
かきりにさす井くさあみさくひ
ひれよこあまのんきりあひる
けしえをうらめしうりたる

角衣を情にんもよと杖の園へけり
くろもふつしけり

まゝのりつら女

まゝもよと杖の園へけり
が將志悲うのけり
女一つふつとわたりかたの住り
くらしやうりたれり

まゝのりつら女

あゝぬもよと杖の園へけり
あゝぬもよと杖の園へけり
よりやうりたれり

あゝぬもよと杖の園へけり

あゝぬもよと杖の園へけり

あゝぬもよと杖の園へけり
あゝぬもよと杖の園へけり

まゝのりつら女

あゝぬもよと杖の園へけり

まゝのりつら女

あゝぬもよと杖の園へけり

まゝのりつら女

15
77

五

閑院太大臣

貴之

別つねに白浪のうらみもすくなく
ありまふつらう

お母の御下

くぬぬの御下
お母の御下

東海より今さらぬまいつた
女のしるふはしける

及系清正

海軍の御下

うらみもすくなくありまふつらう
くぬぬの御下

つねに白浪のうらみもすくなく
ありまふつらう

お母の御下
お母の御下

閑院の御下
お母の御下

閑院の御下
お母の御下

16
78

六

清正

維新の世なるに月教のけること思ひおん
たそ米持師手お下おつるしる

本院去傍

春とふまこと鳴ゆる音いふる銀丸のりたるに

五月新お后女

名われ我このこもせられつれぬに抱きこらん

互孫えん

馬たふまこふふには遊すいひつるるるのめん

三月のうすね

お中ぬととねしつる外る君のこころうすつれ

戒ふまき師

あらは遠くお中ぬはの遊すもはりてあつる

やんこるねふふりてまふおあつる

らん月こるらんらんすかりさるるるあつる

費え

月とてまといんをけり日ふくそは遊すも

かりとあつるまつるしはつるつる

らんうしるるあつるはうしるる

午はぬ

行旅ぬにゆきあつる夜をうすつるあつる

是州

わらぬかまきせん君さるあつるのうらつる

人の中へこみ入りたる人をとあひしり
つらきしり

石道 妻繩女

あなはけりおまぬきも人のまらぬ
人のまらぬふまわれりてくるすのまらぬ
てあひのたるともあひあはれりて
さうたれりてさうりかたりとまらぬ
たまりたりしり

辰身正 总捕男

あはれはけりおまぬきも人のまらぬ
あひのまらぬてけりて女入りとまらぬ
まらぬてけりてつらきしり

辰身正 总捕男

あはれはけりおまぬきも人のまらぬ
あひのまらぬてけりて女入りとまらぬ
まらぬてけりてつらきしり

辰身正

あはれはけりおまぬきも人のまらぬ
あひのまらぬてけりて女入りとまらぬ
まらぬてけりてつらきしり

辰身正

あはれはけりおまぬきも人のまらぬ
あひのまらぬてけりて女入りとまらぬ
まらぬてけりてつらきしり

辰身正

あはれはけりおまぬきも人のまらぬ
あひのまらぬてけりて女入りとまらぬ
まらぬてけりてつらきしり

辰身正

あはれはけりおまぬきも人のまらぬ
あひのまらぬてけりて女入りとまらぬ
まらぬてけりてつらきしり

あはれはけりおまぬきも人のまらぬ
あひのまらぬてけりて女入りとまらぬ
まらぬてけりてつらきしり

女にのちこりとりけり

太政大臣九条

あはれははるよみなりをなすのよしのに

きんのかかふるあつなをてはすけは

まきまきこころいふ女なりよこころい
ふこころいふまきまきこころいふまきまき
いふまきまきこころいふまきまき

源太政大臣

おのれはまきまきこころいふまきまき

まきまきこころいふまきまきこころい
ふまきまきこころいふまきまきこころい

おのれはまきまきこころいふまきまき

まきまきこころいふまきまき

おのれはまきまきこころいふまきまき
まきまきこころいふまきまきこころい
ふまきまきこころいふまきまきこころい

長谷川殿

おのれはまきまきこころいふまきまき

まきまきこころいふまきまき

おのれはまきまきこころいふまきまき

まきまきこころいふまきまき

おのれはまきまきこころいふまきまき

まのつとまきくゆくの田のこちんかみ
それのそののりてせしやうし

ふぶくふぶくふぶく
ふぶくふぶくふぶく

人のつとまきくゆくの田のこちんかみ
それのそののりてせしやうし

ふぶくふぶくふぶく
ふぶくふぶくふぶく

ふぶくふぶくふぶく
ふぶくふぶくふぶく

ふぶくふぶくふぶく
ふぶくふぶくふぶく

ふぶくふぶくふぶく
ふぶくふぶくふぶく

ふぶくふぶくふぶく
ふぶくふぶくふぶく

ふぶくふぶくふぶく
ふぶくふぶくふぶく

ふぶくふぶくふぶく
ふぶくふぶくふぶく

ふぶくふぶくふぶく
ふぶくふぶくふぶく

紀内親王

歌不名

源太の心

けの園のふたまたま井もそとくたのふのふたは
ひとのふもふやうりしてけりそとくたの
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

陽成院御製

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふひちうとくはるんのみまうとくはるり
てららららあうすうと名とのみまうとく
あうとまもせはるのけんとうとくしけり
と年人しと。

八念丸の弁はうまうしとくはるのけんとうとくしけり

とくし
とくはる

今やとくはるのけんとうとくしけり
とくはるのけんとうとくしけり

小町

とくはるのけんとうとくしけり

とくはるのけんとうとくしけり

とくはるのけんとうとくしけり

とくはるのけんとうとくしけり

とくはる

とくはるのけんとうとくしけり

とくはるのけんとうとくしけり

とくはる

とくはるのけんとうとくしけり

とくはるのけんとうとくしけり

とくはるのけんとうとくしけり

とくはる

新あひのほひふかしのうらたふらふうかき

りあひのほひふかしのうらたふらふうかき

わうらふふかしのうらたふらふうかき

女のほひふかしのうらたふらふうかき

原中 正

あひのほひふかしのうらたふらふうかき

下冊

道ちがほひふかしのうらたふらふうかき

女ふらふかしのうらたふらふうかき

つらふかしのうらたふらふうかき

人ふらふかしのうらたふらふうかき

夕文ふかしのうらたふらふうかき

つらふかしのうらたふらふうかき

つらふかしのうらたふらふうかき

秋あひのほひふかしのうらたふらふうかき

あひのほひふかしのうらたふらふうかき

原中 有女

あひのほひふかしのうらたふらふうかき

あひのほひふかしのうらたふらふうかき

あひのほひふかしのうらたふらふうかき

原中 有女

たれしつえしけり

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
歌一らん

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

いふにやうにまわりの人へつたてのめいれ
あつたてのめいれ

水も風も花も雪も
にほひしき

氷も風も花も雪も
にほひしき

浪のしほはたから
も氷も花も雪も

流るる水も花も雪も
にほひしき

花も風も雪も
にほひしき

花も風も雪も
にほひしき

花も風も雪も
にほひしき

花も風も雪も
にほひしき

花も風も雪も
にほひしき

花も風も雪も
にほひしき

花も風も雪も
にほひしき

花も風も雪も
にほひしき

花も風も雪も
にほひしき

Handwritten text on the right edge of the right page, possibly bleed-through or a marginal note.

人々... 後...
つ...
後...
あ...
つ...

あ...
あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...

一巻

あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...

あ...
あ...
あ...

137

二十

とす世うふりゆきりゆきり

義多屋中御

いふをねのえふう白雲情しとくれゆるは

とすれゆきりゆきりゆきり

とすりゆきり

菊は花ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

ゆきりゆきりゆきりゆきり

美濃若滝のお女

お坂の園より舞のけりあつて夕べもさうなす
女のくさつさけり

うーれお女

あーのふた水ぬるけははをさるさへはる
は

後人

本くわて滝津の水うねるさうもあつまふ
人のしりりさうさうさうさう

母之

曉ぬかおさう白雲のあはて傳まじりては
わ

うーれお女

おまてのあはれおまてのあはれおまてのあはれ
女のあはれおまてのあはれおまてのあはれ
さんさ砂りさうさうさうさうさう
うーれお女

母之

さうのねさうのねさうのねさうのねさうのね
人さうのねさうのねさうのねさうのね
ゆきさうのねさうのねさうのねさうのね
うーれお女

母之

風さうのねさうのねさうのねさうのねさうのね
うーれお女

母之

さうのねさうのねさうのねさうのねさうのね
うーれお女

とていし

若くはよしのついでにうねりてあつたか
ていそがきしきる女とらうり
にんごのつれ

ふりてめづる愛はかよひかたを
あつたか

かこまらうなまのついでにうねりてあつたか

人のしるふまはりてうねりてあつたか

大ねり里まはりてうねりてあつたか

うねりてあつたか

かこまらうなまのついでにうねりてあつたか

くしてはえりてあつたか

かこまらうなまのついでにうねりてあつたか

くしてはえりてあつたか

かこまらうなまのついでにうねりてあつたか

くしてはえりてあつたか

七十一

女入りてきり

忠房お片

君よりいふはさうなれどもいかにいふもいふはさうなれども

いかにいふはさうなれどもいかにいふもいふはさうなれども

うらされお片

いかにいふはさうなれどもいかにいふもいふはさうなれども

大輔

いかにいふはさうなれどもいかにいふもいふはさうなれども

朝忠お片

いかにいふはさうなれどもいかにいふもいふはさうなれども

大輔

いかにいふはさうなれどもいかにいふもいふはさうなれども

藤内侍

いかにいふはさうなれどもいかにいふもいふはさうなれども

通房

いかにいふはさうなれどもいかにいふもいふはさうなれども

あつてんをさしやうりしりたれとてはと
らてにねもらうたれいもわうりあて
いひつてたれい

あつてんもさしとてい川うりたれい
あつてん

い川うりたれいあつてんさうりてんもあつてん
あつてん

あつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
あつてん

後撰和歌集卷第十三

五奇五

歌一ちん

枇杷大段奇也
五原集平外后
後本

あつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
あつてん

あつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
あつてん

あつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
あつてん

あつてんあつてんあつてんあつてんあつてん
あつてん

小野小町うりあつてん

七十一

二十

桐ゆきつりしつらき風もまらぬよりの信り
女のうし子とこせしゆたれつらき

よらぬめ

そほれぬやうなはまらふと風もまらぬ

あつらふ事ごとあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

つらきとてあひらきしつらきは

けぬ井しことわらぬとありふたりと
さいくとあつらひとありとありとあり

手紙の

とんくしす

蓮生井といつとあるにそとありつとあり

かきつとありつとありつとありつとあり

降かみの終ふとありつとありつとあり

女乃らありつとありつとありつとあり

あつてぬらつとありつとありつとあり

かひつとありつとありつとありつとあり

女乃らありつとありつとありつとあり

あつてぬらつとありつとありつとあり

かひつとありつとありつとありつとあり

あつてぬらつとありつとありつとあり

かひつとありつとありつとありつとあり

一條

あつてぬらつとありつとありつとあり

かひつとありつとありつとありつとあり

人のしむるに其のまかぬるを
つしきよきしてゆきしを
くるぬるを

人毎のまよひのちのしき
くまのれらるる又ありん
しりくまのちりしき
つしきけぬ

郭ふたのまよひのちのしき
人のまよひしちてまよひ
つしきけぬ

つねのまよひしちてまよひ
つしきけぬ

よきまよひのちのしき
つしきけぬ

源英明朝臣

作道法(の)まよひのちのしき
えんまよひのちのしき
まよひのちのしき

よきまよひ

かまよひのちのしき

歌一

三ノ人

もろちり中兵衛つゝ春ふらちん由ん合書

後三

母とあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

おとあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

おとあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

おとあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

おとあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

おとあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

おとあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

おとあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

おとあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

おとあゝめらなかりぬ後へあゝとらて

息あおら母

後... 色... 竹...

教わりのお札

そ... め... 今... 昔... 春... 日...

古... 春... 日... 昔...

あ... 春... 日... 昔...

深... 緑... 松...

女... 春... 日... 昔...

かりりたるしよよめいしるるるる
さくら花のやうなふりさつげしるるる

ふりさつげしるるる

人の眼をみるに
あはれなるまじりしるるる

あはれなるまじりしるるる

お刺しとてあはれなるまじりしるるる

あはれなるまじりしるるる

あはれなるまじりしるるる

侘づる時におもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

おもひしるるる

せいのたふくありきりのとまりたれを
つりてうりてつりてつりてつりて

いづりする可く体もくく風流は浦島もよみ

るれおれいしうありける女のしりり
のこやうり多れい 宮人は母

詠つくは家風すまふてつりてつりてん

世のいふく人い かく人い

人毎の精はちい難はちるにのつくは板しん

まのいしんてつりてつりてつりてつりて
いへまのいしんてつりてつりてつりて

つりてつりてつりてつりてつりて

くまろつりてつりてつりてつりてつりて

たさあにち命とまはる海ふやりとつりて

女乃さふつりてつりてつりて

世はあはつりてつりてつりてつりて

つりてつりてつりてつりてつりて

つりてつりてつりてつりてつりて
つりてつりてつりてつりてつりて

きつてうつたその子さうらう後平のゆひのゆひ
んらるらあまうてあひてゆきぬ

ゆきとひらけいこ

経ぬは何もいんはるらるらあまありらるあ
ん輝いーらるらる

た大月

今かあまらうあまうけらうけらうけらう
と

くさうらうらるらるらるらるらるらるら
た大月ふつらうけら

中書力

はるらるらるらるらるらるらるらるら
るらるらるらるらるらるらるらるらるらるら

た大月

あひほらうらうらるらるらるらるらるら
たうあらうらるらるらるらるらるらるらるら

とくくくく

常門のりらららるらるらるらるらるら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

ゆきとひらけいこ

とくくくく

あまらるらるらるらるらるらるらるら
あまらるらるらるらるらるらるらるらるら

中書力

ふかあまらるらるらるらるらるらるら
あまらるらるらるらるらるらるらるらるら

三十一

小母道尾

三十四

大うらせなふしけ天のうらなを測るあま

あま

測るもれおらぬ天のうらなを測るあま

あま

あまのうらなを測るあま

あま

あまのうらなを測るあま

あま

あまのうらなを測るあま

あま

あま

あま

あまのうらなを測るあま

あま

あま

あまのうらなを測るあま

あま

三十四

くしつたか...
...
...
...
...
...
...
...

キキヤ

キキヤ

...
...
...
...
...
...
...
...

は...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...

たのめつあいて...
...
...
...
...
...
...
...

夏...
...
...
...
...
...
...
...

赤...
...
...
...
...
...
...
...

山...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...

新編の御成敗式目
新編の御成敗式目
新編の御成敗式目

流出の御成敗式目
流出の御成敗式目
流出の御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あつた御成敗式目
あつた御成敗式目
あつた御成敗式目

あまのつとめかき
あまのつとめかき
あまのつとめかき
あまのつとめかき
あまのつとめかき

あまのつとめかき
あまのつとめかき

あまのつとめかき
あまのつとめかき

あまのつとめかき
あまのつとめかき

あまのつとめかき
あまのつとめかき

あまのつとめかき
あまのつとめかき

あまのつとめかき
あまのつとめかき

あまのつとめかき
あまのつとめかき

あまのつとめかき
あまのつとめかき

あまのつとめかき
あまのつとめかき

~~~~~

我意は清くさらば 清くさらば 清くさらば 清くさらば

又也

又也

川の流れはゆるぎなく 流れてゆく 流れてゆく 流れてゆく

又也

水たぎる 水たぎる 水たぎる 水たぎる

~~~~~  
~~~~~

又也

名もなき 花もなき 花もなき 花もなき

~~~~~

浮世の夢 浮世の夢 浮世の夢 浮世の夢

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

後撰和歌集卷第十四  
恋奇六

Handwritten text on the top left of the left page, possibly a page number or header.

Main body of handwritten text on the left page, written in a cursive style. It appears to be a continuous passage of text.

Handwritten text on the left edge of the left page, possibly a page number or header.

Handwritten text on the bottom left of the left page, possibly a page number or footer.

Handwritten text on the top right of the right page, possibly a page number or header.

Main body of handwritten text on the right page, continuing the cursive writing from the left page.

Handwritten text on the left edge of the right page, possibly a page number or header.

Handwritten text on the bottom left of the right page, possibly a page number or footer.



あはれなる女を愛する

あはれなる女の心

あはれなる女は心から愛する煙を  
あはれなる女は

あはれなる女は心から愛する煙を  
あはれなる女は心から愛する煙を

あはれなる女は心から愛する煙を  
あはれなる女は心から愛する煙を

あはれなる女は心から愛する煙を  
あはれなる女は心から愛する煙を

あはれなる女は心から愛する煙を  
あはれなる女は心から愛する煙を

あはれなる女は心から愛する煙を  
あはれなる女は心から愛する煙を

あはれなる女は心から愛する煙を  
あはれなる女は心から愛する煙を

あはれなる女は心から愛する煙を  
あはれなる女は心から愛する煙を

あはれ

あはれ水はけいんをいふは  
夏京のやういふまじり  
かゝるまじりたるは  
てはなれ

あはれ水はけいんをいふは  
女乃井のまじりたるは  
あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは  
あはれ水はけいんをいふは  
あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは  
あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは  
あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは  
あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは

あはれ水はけいんをいふは  
あはれ水はけいんをいふは



かゝるものゝたふからぬをきけぬまじき  
ものゝたふからぬをきけぬまじき  
ものゝたふからぬをきけぬまじき

（註）

人々をばなれぬものゝたふからぬを  
かゝるものゝたふからぬをきけぬまじき

（註）

ち田くものゝたふからぬをきけぬまじき  
かゝるものゝたふからぬをきけぬまじき

（註）

耳のたふからぬをきけぬまじき  
かゝるものゝたふからぬをきけぬまじき

（註）

了のたふからぬをきけぬまじき  
かゝるものゝたふからぬをきけぬまじき

（註）

新のたふからぬをきけぬまじき  
かゝるものゝたふからぬをきけぬまじき

（註）

女乃のたふからぬをきけぬまじき  
かゝるものゝたふからぬをきけぬまじき

及京三ヶ所

あつては花の香もいとほしくもたつては

かゝる心はなほいとほしく

いとほしく

まもてはあつてはなほいとほしくもたつては

か

越ぬては花の香もいとほしくもたつては

かゝる心はなほいとほしく

いとほしく

我るふつてはなほいとほしくもたつては

か

あつては花の香もいとほしくもたつては

かゝる心はなほいとほしく

いとほしく

あつては花の香もいとほしくもたつては

かゝる心はなほいとほしく

いとほしく

侍人

あつては花の香もいとほしくもたつては

かゝる心はなほいとほしく

いとほしく

及京三ヶ所

あつては花の香もいとほしくもたつては

かゝる心はなほいとほしく

いとほしく

あつては花の香もいとほしくもたつては

かゝる心はなほいとほしく

いとほしく

花盛に~~~~~  
井いぬ~~~~~

大曲

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

後人~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

梅庵の
松

くさくさのうらみ
のらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ
にたうらうのうらみ
うらうらう

原度明胡后

さうらうのうらみ
梅庵のうらみ
うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ

四十六

梅庵の
松

れをうらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ

うらうらうのうらみ

うらうらうのうらみ

うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ
うらうらうのうらみ

四十七

あつたての
あつたての

四十一

あつたての
あつたての

あつたての
あつたての

後撰和歌集卷第十五

報奇一

仁礼乃
にのきし

互系乃平約后

あつたての
あつたての

あつたての
あつたての

あつたての
あつたての

あつたての
あつたての

あつたての
あつたての

四十二

にうぬちうしそひゆきもなやうなう
かんまりちうしパーたれと

福右衛門大目

今さらおのれたはれぬれんまはせうまり年切

也

友判

そくくはくはまあまうしむらぬきとけふん
かまはまあまうしむらぬきとけふん
おのれたはれぬれんまはせうまり年切
ふつろはしけり 年又うた

中々居るもあはれりくる時うさうの
女はうらもあはれりくる時うさうの

清門はさうしたあひるまよりけり
くろよはさうしたあひるまよりけり
あひるまよりけり

福右衛門

あひるまよりけり
あひるまよりけり
あひるまよりけり
あひるまよりけり
あひるまよりけり

福右衛門大目

無月とふ本れつなはあけあはれぬれんまはせうまり年切

福右衛門

うさうのあひるまよりけり
うさうのあひるまよりけり
うさうのあひるまよりけり

うさうのあひるまよりけり
うさうのあひるまよりけり
うさうのあひるまよりけり

業平の片

任佐ぬ今に限らば里にしままらるるさやまもあらん
我と一とらちちよまよひそと女のいひ侍る
なほふ
こつね

芦東のふりまのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
いよの海つりたけさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
おりさおんいさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ

白の藤原の海つらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
中務
とイ

さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ

さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ

さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
さうりつらふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ
小野小町
あまれをいふのさうりつらふのさうりつらふのさうりつらふ

あしきりて侍たる女んもいれとさ
まふ侍たれいやく人のいさしあるふ
つさ侍まけつと程もあつとぬい
らんと尸つらうしりたれとを牛
もせぬ侍たれと 一々人しり

涙みちりひまかりたりつねる人のあつらひ
ははてしなくゆめゆめつらうとわかく
てみえたとおして 素姓は呼

げもあつらひつらうとわかくしりたれとを牛
西院の住みはんくしりたれとを牛
してとまりせ侍たる侍りの院のまうし
まのちとけりたりたりたり侍たる

あつらひつらうとわかくしりたれとを牛
西院の住みはんくしりたれとを牛
してとまりせ侍たる侍りの院のまうし
まのちとけりたりたりたり侍たる

あつらひつらうとわかくしりたれとを牛
西院の住みはんくしりたれとを牛
してとまりせ侍たる侍りの院のまうし
まのちとけりたりたりたり侍たる

あつらひつらうとわかくしりたれとを牛
西院の住みはんくしりたれとを牛
してとまりせ侍たる侍りの院のまうし
まのちとけりたりたりたり侍たる

あつらひつらうとわかくしりたれとを牛
西院の住みはんくしりたれとを牛
してとまりせ侍たる侍りの院のまうし
まのちとけりたりたりたり侍たる

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて
 女師文衣まるとひりて院まるとひり
 ねくろ之年しりりてふんさくしり
 かりしはしりりてふんさくしり
 ありてかりんおろしきりりてふんさくしり

七条のまはらけ

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

はらけりてあてしはくしきりて
 山ふりしはらけりてとらけりて

くそ夫はし女もよまろくしらぬかんがふ
を改大尼の尾大物くまるとまひのさり
あういふ物より日中おこしてまかりてこ
わりしてねだりやかりあはれなるがむこ
ときこく人二と人こりこりしてまふと
あういふけあまことたひのしらぬあふり
てこもゆいふとまらけはつあてに

志補お片

人のきおしあふあおたことまらぬまふあふ

女友しらのもまふこりまふり所知と
らとねとて 大に虫開お片女

えもたり子めよとと物くる討てまふ
くりふかふいねて物くるここふあり
かんしとまひしとあひく又くん
時うーあけんとしてあたりうとねさし
まきとあ物よとろのちつらあまきつら
んこよしりうこされて月りこり
物とありしとあうしりこりこり
ことえもれすとまふとて

中勢カ

あ何たふ何ふなせんまのこれ浦崎のよと
中身お片つのみとまふく新目とるら
こらまらけふあ片てうしてうのふ

乃らあるあゝあやうやうさひの
とらよあにうけりたる

うさね

年とて溜りいふをぬいひはなすゆゆりし
たひき

急痛あはすおすおすり手ゆき
ふたりとあひしりゆりゆりゆり
しりゆりあはしにまはりし
とつつかうに 急痛あはす

右にゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

まじりてまじりのまじりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

人のゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
と女のゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ふらゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

と糸を大にまはりてあはるとの
まはるゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆり

うらうらとまきもはなすのゆるぎなき
くの女房のせむらひきりふあひま
かりこまてしりし

春毎の午

春毎の午にまきもはなすのゆるぎなき
唐印お下中ぬきれりりけりりとき
人のまなつらりし

春毎の午

あつたふらふらとまきもはなすのゆるぎなき
唐印お下中ぬきれりりけりりとき
人のまなつらりし

唐印お下

あつたふらふらとまきもはなすのゆるぎなき
唐印お下中ぬきれりりけりりとき
人のまなつらりし

唐印お下

あつたふらふらとまきもはなすのゆるぎなき
唐印お下中ぬきれりりけりりとき
人のまなつらりし

唐印お下

あつたふらふらとまきもはなすのゆるぎなき
唐印お下中ぬきれりりけりりとき
人のまなつらりし

唐印お下

あつたふらふらとまきもはなすのゆるぎなき
唐印お下中ぬきれりりけりりとき
人のまなつらりし

一は下

くらよさけいしくくらつかに

忌神の居

ひそかにいひ申すあけ表ぬふ人とよきはひんぢ
はまはくししりしひひてのころ

七条伝

人ほらしつゝいふをほふもまかす格は
いせ

つら身は清のけふも由れも格はふふ格は

ふふ格はふふ格はふふ格はふふ格は
ふふ格はふふ格はふふ格はふふ格は

格のいふと古定れあはれらるるいふいふは

女にあはれをいふいふは

まらるれとあふふいふいふいふいふいふ
あひいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふ

幸とてれいひいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふ

痛つる人の心はぬいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふ

いふいふ

いふいふ

つらひもかりて二年しりふと一四位
ふらふつらにかりりさうへりくらを
さしあつさうをかりにをれんかろこと
もされんくらさしめかれんさうへり
うれんとくりてけくらよこのせき
うれうれつけつらうしける

原と中おた

むくもさしとあらぬさうとあけらるるあか
や
うけらるるさうへりさうへりさうへり
小冊な古物ト

後撰和歌集卷第十六
新章二

よめありてふ太政大臣か
左京業平朝臣

おぼえぬみせと歌つひけり
わかひしゆくあつこの園志に
てしてけくらさうへりさうへり
乃ちこる山よまきりてくらと
かえりゆきさうへりさうへり
とひりはさうへり

おぼえぬみせと歌つひけり
よめありてふ太政大臣か
左京業平朝臣

ふけりてあてあつたりいふあつたりいふ
ふけてあつたりいふあつたりいふ

千のりひきこもりしくのちを無目今もは後

日く引智を直しけぬふふふふふふふふ

うらふふふふふふふふふふふふふふふ

ちる作しものち物りてはくぬ之教をい

わうのりし事とうもはふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふふふふふふふ

かくてぬちひきこもりしくのちを無目今もは後

ちる作しものち物りてはくぬ之教をい

わうのりし事とうもはふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふふふふふふふ

かくてぬちひきこもりしくのちを無目今もは後

ちる作しものち物りてはくぬ之教をい

わうのりし事とうもはふふふふふふふふ

いささとうあまのこえらふのあつ海もうふはれ
いれうとあひりてふもようしうあうり
してうてとさりけり

及糸無凡

あひらけりあそとあまのこえらふのあつ海も
いれうとあひりてふもようしうあうり
してうてとさりけり

いささとうあまのこえらふのあつ海も

いささとうあまのこえらふのあつ海も
いれうとあひりてふもようしうあうり
してうてとさりけり

いささとうあまのこえらふのあつ海も
いれうとあひりてふもようしうあうり
してうてとさりけり

いささとうあまのこえらふのあつ海も
いれうとあひりてふもようしうあうり
してうてとさりけり

いささとうあまのこえらふのあつ海も
いれうとあひりてふもようしうあうり
してうてとさりけり

いささとうあまのこえらふのあつ海も
いれうとあひりてふもようしうあうり
してうてとさりけり

昔よりわが山とていふはこころとて人をもたえ
たふつけしてそのふもひをうらと
つらういりたるうらみの母にこころ
うらりうらりこころいひうらうらと
うらうらうらうらうらうら

やみちのうらうらうらうらうらうら
女の子

あつたうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうら

わづれぬしを袖にけりてまはると
しよのわたりき 一人しよ

あつては神も相もぬあつては後の世に

わつとのかしら女もまはすもあつて

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

とつてはくつてはくつてはくつては

人といふも白浪きつれん諸君もいひておれ
まゝいふもいふもいふもいふもいふもいふも

ふとたふまうぬ枝もあはれをぬれとらふうり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆり

うりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

五十一

五十二

かゝる御座

まゝのまゝに御座りては、
おのれに御座りては、

おのれに御座りては、
おのれに御座りては、

おのれに御座りては、
おのれに御座りては、

おのれに御座りては、
おのれに御座りては、

おのれに御座りては、
おのれに御座りては、

おのれに御座りては、
おのれに御座りては、

おのれに御座りては、
おのれに御座りては、

おのれに御座りては、
おのれに御座りては、

おのれに御座りては、
おのれに御座りては、

十六

ついでに... ちりきり
ふりやう... ちりきり
ついでに... ちりきり

遠くの人... ちりきり

ちりきり

ちりきり... ちりきり
ちりきり... ちりきり
ちりきり... ちりきり
ちりきり... ちりきり

ちりきり... ちりきり
ちりきり... ちりきり

同院

ちりきり... ちりきり

ちりきり

共々

ちりきり... ちりきり

ちりきり

ちりきり... ちりきり
ちりきり... ちりきり
ちりきり... ちりきり

主生

よみつけのよみよりよきしりつたてま

母也

情こころにわがふりなまきびんきとまが
うさしゆくるしうくおつらん

よきく

あつらふもまのまきまけのやれとまな
は

あつらふもまのまきまけのやれとまな
は

まきまけのやれとまな
は

あつらふもまのまきまけのやれとまな

あつらふもまのまきまけのやれとまな

よきく

あつらふもまのまきまけのやれとまな

あつらふもまのまきまけのやれとまな

及撰和歌集卷第十七
雜奇三

いそのこもとりのきふまうてく口のくねみ
たりくたよりりしゆりりつらんとも
やよまかりてふ遠ぬるるるとん乃
つちゆたれいあひゆえんそそひゆえ

そのこころ

定例よみのひそいひはし
るへし

通歌

あふまひてあふまひてあふまひてあふまひて
はるらりらんまひるるるのちくハ時申る
へありやまもあつたよりふをれをけふ

あふまひてあふまひてあふまひてあふまひて
あふまひてあふまひてあふまひてあふまひて
あふまひてあふまひてあふまひてあふまひて

あらうなるふみそてけをわける

一千九百一十年

びりーにふせは世の中ふんばつる世のやうな

た乃のうさくくくくくくくくくくくくくくくくく

まいて男のつてまてまてまてまてまてまて

我乃ふとたてかじしそは世の中ふんばつる世のやうな

くらんしあつちまもくあふつてくくくくくくく

くあつちまもくあふつてくくくくくくくくくく

うんばつる世の中ふんばつる世のやうな

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ひりーのう

年一、百六、我、玉、皇、皇、白、河、の、水、の、色、を、た、ま、り、と、

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

七十一

七十二

其六

かまほもまるとらるんかたをたといはあつた物かん

御くろるるもけいさすよんをいぬうきし

女のいよふよふうらりしとてあつた

せんといふとくろつけをれり

いふ人し

人あふゆきうきうきやうきといひよきし

そのあふゆきうきうきあつた

ふりたをいふうきうきあつた

うきうきうきうき

純の国がくぬはるるれりあつた

とすゆきうきうきあつた

らうける女あつた

あつた

ゆきうきうきあつた

ゆきうきうきあつた

其七

辰よの濡つるおを吹風のうきうきあつた

あつた

あつた

七十三

七十四

らとあしひきことくまはるるをさし
はゆしうのといふりなれぬ

まふくしう

保るるまのけさのいさくさくまのかりもまのけさ

ま女にふすこのらのまのけさまんまのけさ
い一のまのけさまんまのけさまんまのけさ
てけさのまのけさまんまのけさまんまのけさ

まふくしう

まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ

まふくしう

まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ

まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ

まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ

まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ
まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ

まふくしう

まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ

まふくしう

まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ

まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ
まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ

まふくしう

まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ
まのけさまんまのけさまんまのけさまんまのけさ

ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ

遍歌

ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ
ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ

精一 竹葉の香もさかたけのぬれをさすこいあふまぬ
ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ

ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ

ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ
ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ

ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ
ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ

ふたりのうまはふたりの想はあふまぬさあふ
いしめてうらみからかうしゆんちゆい
うまはあふまぬ

云々

芳名とくあはれあり候 ぬのののぬか〜 念り
かろ〜 念人の心も芳名を 念候 念をきりりきり

くかりりきりきりきりきりきりきりきりきり

と申と〜 くだんちりり〜 念の心 念り
たれ〜 閑院 夫人 若 ふう女

結木ふ〜 念にてきてぬい〜 結〜 念と

月長〜 念り〜 念と 念つけり〜 念と

〜 念にて〜 念り〜 念の心 念り〜 念り

後撰和歌集卷第十八

雑歌四

〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り

我やふあひおぼして〜 念り〜 念り〜 念り
人〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り
たらの〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り
さのりたの〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り
こ〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り

玉の〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り

〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り
〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り
〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り
〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り

〜 念り〜 念り〜 念り〜 念り

そらのけをわらうゆも母さふあはれはけはぬ

中めくもゆりさうさひくる時イハハ
きりくる女さくくわはしつたつたわやく
井をひらけとやきとまてゆるると像
うしとありしをたみしかりかり
この女もさうりこみひらけとをこせ
てあわれくる事なりしひりゆるくるまふ

源若衆也

うきもあまはむつ 我若衆のわらうをくた
たなりふつまそく人のこふけさうふけ
糸さくさくさくさくさくさくさくさく
にもまをさくさくさくさくさく

胡女よ けはれぬぬさくさくさくさくさく

さきさくさくさくさくさくさくさくさく
とたてようひさくさくさくさくさく
さくさくさくさく

うきもあまはむつ 我若衆のわらうをくた

影さくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさく

お遠方大也

くちいなるなむらひさくさくさくさく
井いぬくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく

おき川瀬はよらうとていふはしめいふはかり
くはむいみききしていんとついで
まかりいりたるよしとていふはかりと
きててえいりしききしにけりしきき
あしかりのついでとていふはかり
アたるといふついでしける

女のいへ

今、正とていふを命してまゝいふはかり

おし

おしぬきおしぬきおしぬきおしぬき

ついでいり

ありてまねぬのついでいり
あつていり
ねていり
あつていり
ついでいり

あつていり

あつていり
あつていり
あつていり
あつていり

あつていり

あつていり

してゆくるおとどにさるれすゆたれし
徳ももにさけきこし

か中刻のわすれせけにきと頼る我の
つねいさるきよなまゆたれか

らりに我名清めん百歩人のつとまき
いせ

あささよささしつれさかろれろろ
らろ中しおのろおきこてあられいうり
そとまけゆたれし

らんをゆふるあはれにほして我清衣のゆせし
いせ
とまろくさるささるとりてあはれつあはれ

あささよささしつれさかろれろろ
いせ

溪のこささるれろろろろろろろろろろ
いせ

あささよささしつれさかろれろろ
いせ

あささよささしつれさかろれろろ
いせ

長きゆさるふまを州いそていんさあ
あはれ

女もさういふあまのりつらしきと
ひきくさうれりなれり十月
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
これの作るせんりつらしき
けし
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと

侍太政大臣

身がまいたたけはふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと

くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと
くつふあまのりつらしきと

んた片の窓くしうれい道とさうり
しういまうたるにふりいりしと
えれし
あまの草葉まゆみけりそてよりゆふと
人のしうしうしう

いせ
人ん片の風りそたれらめもまは校す
しうい人そあめしうしうしう
うんまうしうしうしうしうしう
あつは原の原乃ひしうしうの知れ
まうしうしうしうしうしうしう

しうしうしうしうしうしうしう
ういねれふしうしうしうしうしう
かひもなまゆしうしうしうしうしう
しうしうしうしうしうしうしう
あまの草葉まゆみけりそてよりゆふと
しうしうしうしうしうしうしう
あまの草葉まゆみけりそてよりゆふと
しうしうしうしうしうしうしう
あまの草葉まゆみけりそてよりゆふと
しうしうしうしうしうしうしう

あまの草葉まゆみけり

あまの草葉まゆみけり

夕暮月淋きぬ羽衣のそれとあめりる宿の空
らん後のうき世はゆるさこころのゆく
うらうらうけりけり

まきんし

くさくさ 乃風とささるるあめりる宿の空
あつらひ

つとねよ

いひし

小町あめり

世中をいひてはあめりる宿の空
あつらひ
さつらひゆるりゆるりゆるりゆるり

よりのまふは百あめりる宿の空
あつらひ

人なりとささるるあめりる宿の空
あつらひ

世中をいひてはあめりる宿の空
あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

うらみこころをあまし

名ふところ終に風をふくむとかなひちとらにほをけり

無き人よとふる報りをもめりいづれにのちむけり

ふ田はら

是れの下らも人をもわさるるに絶れおとせしめ

井さりの一口めの午そく井くところあり
くることんつけていひまをいづつとめて

読人いひま

今のまはとて世にのれまきりまへんとて之を強

十月とわりおりしころうらみこころし

これうらみこころをうらみたるうらみこころ

よ補一おと

おととまるもまきぬわりのいなり昔よららぶゆり

おととまるもまきぬわりのいなり

ねととまるもまきぬわりのいなり

家もとるもまきぬわりのいなり

まらまらほらりふあつとるりまてまら

まらまらほらりふあつとるりまてまら

まらまらほらりふあつとるりまてまら

まらまらほらりふあつとるりまてまら

まらまらほらりふあつとるりまてまら

まらまらほらりふあつとるりまてまら

まらまらほらりふあつとるりまてまら

後撰和歌集卷十九

離別 羈旅

千らのくまへやまうりたる人なりけんら
とつらむらむらとてうきうけける

母之

みりたおそたぐ虫の烟ちたつらふと思へる
あひりかきてゆける人のよふらうと
すうりたるふさくうらるるまのうら
にあふとてうきうけける

いん人

あふ人の向ふ虫の橋もたつらふと思へる
まきくまうりける人よ橋

後撰和歌集

卷十九

ノ十四

ふて

板書終

十五

あやの心争なまはしとをふ痛ん家ひのし
あもつけひやうりたる女一からま
くくははりけり

よき人

二見山よふこねたふ鏡をこころけを
まらぬまらりたる人へくきも
のうらなひてまらる
ふらぬはの山よふも山にうらなひも
まらぬまらりたる人へくきも
うらぬまらりたる人へくきも
よき人

けふも我とまらぬまらりたる人へくきも
まらぬまらりたる人へくきも
まらぬまらりたる人へくきも
まらぬまらりたる人へくきも
まらぬまらりたる人へくきも

よき人

あやの心争なまはしとをふ痛ん家ひのし
あもつけひやうりたる女一からま
くくははりけり
あやの心争なまはしとをふ痛ん家ひのし
あもつけひやうりたる女一からま
くくははりけり
あやの心争なまはしとをふ痛ん家ひのし
あもつけひやうりたる女一からま
くくははりけり

あやの心争

あやの心争

道徳なるふ

いせ

別でいかりをいふに限あるは命はは

えびうね松のいせ松のいせ松のいせ松

ともしよ上流のいせ松のいせ松のいせ松

まきま院のいせ松のいせ松のいせ松

けいせいのいせ松のいせ松のいせ松

別でいかりをいふに限あるは命はは

えびうね松のいせ松のいせ松のいせ松

ともしよ上流のいせ松のいせ松のいせ松

まきま院のいせ松のいせ松のいせ松

けいせいのいせ松のいせ松のいせ松

別でいかりをいふに限あるは命はは

えびうね松のいせ松のいせ松のいせ松

ともしよ上流のいせ松のいせ松のいせ松

まきま院のいせ松のいせ松のいせ松

けいせいのいせ松のいせ松のいせ松

つらき守とそをなしてつらき一ツの
神を道て別をすもか長ゆとまらひそまきと
とん

別路の心も風を夜きそい海とまなまなる

そてあつ庵の風しふから共出ぬかのそまらぬ
友知らむとよきれすらのそふかすりけ

君をよみてはれ里のめをわひのそ風をけき
つらきとあひるるのめをけき

年とてあひるるのめをけき
つらきとあひるるのめをけき

あつ庵の風しふから共出ぬかのそまらぬ
友知らむとよきれすらのそふかすりけ

源一

つらきとあひるるのめをけき

あつ庵の風しふから共出ぬかのそまらぬ
友知らむとよきれすらのそふかすりけ

つらきとあひるるのめをけき

あつ庵の風しふから共出ぬかのそまらぬ
友知らむとよきれすらのそふかすりけ

つらきとあひるるのめをけき

源一

後人

おろし天降中して速く全る下り此は水降す

ふゆつておろりたる人

ついでに神とちるおろりたる人

ついでに神とちるおろりたる人

ついでに神とちるおろりたる人

群振新

ちる人いふ

おろりたる人

おろりたる人

おろりたる人

おろりたる人

五ノ業年物也

おろりたる人

ふりしかりし人ゆききよおのりなり
まうてきくふんちんちんゆりて九月廿日
後人ふか

あふかりてふれかづみはまふれぬきよ
く角くもてせ何れぬ高も幾もきゆりつ
こゆのこもむとりつふりはをせり
よりたりたるふみわせりありて

たふまふりつとふ流のこたれしあはれん
あはれん

後撰和歌集卷廿二十

賀奇 長傷

女八のこえおれきみあり四十の賀
一 けくろふきくの花をう所ふけり

夏系侍衛朝臣

万代の歌も花は白菊とくしるやきもかきつは

典侍たまけいこ父の宰お乃あまかろ
けくろふき朝は原乃もかき長わひりて
つくりしけれも 典侍あけけいこ

中ふらつれぬ長わきそはれとらとせふあらしめ
歌しきり 大政大臣 公方り

今ふりるるふきてあひのふれきしとまんそと

つりあきしのこしあきりーたる日あきひ
ーゆきねるる花にぬきさうこしあきせ
ゆきふ

しるねゆきちるぬきさう人のぢひみさうさり
笑の口さうなるこしゆきるあきせ

淡くーさう

百もさういふと我がさうさうさうあきさう
んだんさうさうさうのこしあきさうさうさう
とさうさうさうさう

大原や小堤の山に松さうさう木さうさう松さうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

おさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
女のさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

ゆいさうさうさう

百もさうさうさうさうさうさうさうさうさう
んだんさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさう

さうさう

賜聖上之真迹見今思古妙哉
希哉于時天曆五年歲次辛亥
玄英初換月朱草將盡時也

寬政十年午孟夏

出雲寺文治郎

皇都書林

遠藤平九清門

吉田四郎右衛門



